埋経研究と社寺境内絵図

――京都・神童寺絵図をめぐって――

難波田　徹

1　問題の所在

歴史考古学のジャンルのなかで、近年注目を集めているものの一つに「埋経」がある。近年とはいっても、すでに江戸時代の地誌類などに経筒や経瓦などの紀年銘をはじめ銘文が金石文として所載されたりしているので、近年という言葉があたるかどうかと思われようが、ここで近年といったのは、学術的な発掘調査が各都道府県で系統的に行われるようになり、多くの成果を収めているという意味で使ったわけである。その成果が報告書として刊行され、全国的に集計してみても、研究者の間でかなりの数の共通の財産をもつことが可能になってきたのである。[注1] こうした成果は、これまでに偶然の機会に発見されたり伝世されてきた諸資料にかなりのインパクトを与えていることも事実であろうが、埋経研究は、こうした両者合まって今後とも研究を続けていかなければならないという宿命のようなものをもっているのも事実であろう。発掘調査とはいっても、そこが埋経の地として発掘されるのはごく稀で、どちらかといえば古墓などの発掘などの際に発見され、こうした関係で調査が行われることの方が多い。京都府福知山市の大道寺跡などもその一例であろう。[注2]

筆者は最近、こうした埋経がどのような立地条件というか、地理的環境に築かれていたのかということに強い関心をもち、往時の社頭景観や堂塔伽藍などを描いた、いわゆる古絵図資料に注目し研究をすすめてきている。こうした古絵図をみる場合、従来はどちらかといえば社頭景観などの在り方を重視し、境内にある石造物などは特殊な場合を除きあまり研究の対象になっていなかったように思えてならない。しかし、古絵図資料はそこに描き込まれたすべてを分析することによってはじめて客観的な評価が得られるのである。こうした一つの試みとして、『考古学ジャーナル』の第二六九・第二七一号（昭和六十一年十一月・昭和六十二年一月）に「経塚研究と〝古絵図〟」という小文を発表したのである。その時に扱った古絵図は、重要文化財の祇園社絵図（京都・八坂神社蔵）、賀茂別雷神社絵図（京都・賀茂別雷神社蔵）、重要文化財の称名寺絵図（神奈川・称名寺蔵）の三件で、制作の動機はそれぞれ異なるが、いずれも社寺境内絵図の範疇には

いる古絵図資料を扱っての研究であった。その時のことをごく簡単に要約すると、古絵図には他の宗教画や世俗画と異なり、画面に建物などの名称の書き込みが多くあるという特徴に触れるなかで、今後これら古絵図を精査すれば、埋経研究はいうに及ばず、広く考古学一般の研究にも大いに役立つのではないかということを強調したつもりである。さらに、これら古絵図の制作年代がいつの時代のものであるかが判明しても、描かれた社頭景観が制作年代の時期のものであるのか、それよりも時代の上るものであるのかを見極める必要があるのである。ここが古絵図の資料として扱う場合にもっとも注意しなければならないことなのである。古絵図の場合には後世にかなりの書き込みを行うことがあり、他の絵画資料とは異なるが、こうしたことはこれまであまり研究の対象とはなっていなかった。書き込みを行うこと自身に古絵図の生命があったともいえようが、いずれにしてもそこに描き込まれた諸情報を的確に分析しなければならないのである。さきの祇園社絵図の場合には、「聖域」の建物が何らかの事情でなくなっても墨書で現在は建物が無いと後世に書き込んでおり、「俗域」については新たに建物などを描き込んでいる。このように、「聖域」と「俗域」を明確に区別しながら後世の書き込みが行われたことも明記しておく必要があろう。

この古絵図資料は多種多様にわたっているので一律に論ずることはできないが、昭和六十年七月に京都国立博物館で行った特別陳列『社寺絵図とその文書』の目録のなかで、下坂守氏が「社寺絵図の分類」を発表されている。そこで下坂氏は社寺絵図を制作目的で五つに細分類された。その一は、社寺への参詣の代償行為として純粋にこれを礼拝するために作られた社寺曼荼羅図、その二は、社寺への参詣の勧誘に用いるために制作された社寺参詣曼荼羅図、その三は、境内の建物の配置等を記録するために制作された社寺境内絵図、その四は、境界の牓示を明示するために制作された社寺牓示絵図、その五は、境内の建築物を記録するために制作された社寺建築絵図の五分類がそれである。社寺絵図をこの五分類するという下坂氏の分類は大変有効な分類であると、筆者は今のところ考えている。このうちの五を除くすべてに埋経をはじめとして考古学に関する諸情報が盛り込まれているのである。社寺絵図の範疇に入らないのでここまで言及してこなかったが、荘園絵図にも社寺絵図と同様のことがいえよう。荘園絵図とはいうまでもなく、荘園の四至の牓示などが確認された際に制作されたが、その牓示や牓示石を知る手懸りとしてこうした荘園絵図も今日かなり有効な資料となってきている。

これまで埋経の本義としては、釈迦入滅ののち、五十六億七千万年後にこの釈迦にかわって来世を救う弥勒の世まで経典や法具を伝えようとするところにあるとされ、時代とともに極楽往生や現世利益、追善供養などの願意が加わって多少の変化がみられてくるというのが、これまでの埋経の歴史についての通説であった。しかし、筆者は、これに加えて社寺領の四至が確認されたときにもこした埋経の行われた可能性のあることを指摘したことがある。[注3] いつも例にあげる大阪・勝尾寺の境内発掘の際にその四至から仏像が出土したことがあり、京都・北野天満宮の境内から埋経の遺物が出土するなどは、四至安鎮のために埋経が行われたことを意味しており、仏像でも経巻でもよかったわけである。このことが肯定されると、三つの社寺絵図に加えて、四の社寺領の四至の牓示が確認された際に描かれた社寺牓示絵図も埋経の研究に欠かすことのできない資料とな

ってくるのである。[注4]

こうした古絵図を援用しながら学術発掘の成果をおさめた事例も報告されているので、今後ますます古絵図資料は注目されてこよう。

この小文では、京都府相楽郡山城町大字神童子小字不晴谷にある神童寺の古絵図を取り上げ、埋経の一端を紹介することにしたい。なお、この神童寺絵図に描かれた埋経については、さきの『考古学ジャーナル』ですこし触れたが、ここでは今後の埋経研究に役立てばと思い本格的に扱うことにした。大方諸賢の御教示を賜わりたい。

2　神童寺と古絵図

今日、中世の社寺の景観を描いた社寺絵図がかなりの数伝えられているが、これとは別に、近世・近代に何らかの目的をもって中世の往時の景観を模写した絵図も伝えられている。ここで取り上げる神童寺絵図もその一例であるが、こうした時代の経過とは別になぜ中世のものを模写したのかその動機ははっきりしないが、二、三の例をあげてみよう。祇園社絵図が原本として伝わるのは元徳三年（一三三一）のものであるが、文政五年（一八二二）、明治三十年代にもこの絵図が忠実に模写されている。賀茂御祖神社のは南北朝時代のものが今のところ原本と考えられているが、安政三年（一八五六）、明治三十八年にもそれが模写されている。神童寺所蔵の絵図の画面左隅には、「本ニ日　永正六巳巳（ママ）年九月廿八日所画也然後寛永十癸酉年四月十六日再画之云々亦復再模写之畢印」とあり、この場合は原本は伝わらず江戸時代後期のもの、すなわち神童寺所蔵のものしか伝わっておらず、寛永十年（一六三三）のも今のところ確認できていない。こうした近世に中世のものを模写することはこの他にもかなり認められるが、なぜ模写されたのかということについては、今後の大きな研究課題の一つとなってこよう。このことについてかつて景山春樹氏は興味ある所論を展開されているので今後の研究の一指針として紹介しておこう。景山氏は、祇園社絵図が後世、春日、山王、八幡、熊野などのように宮曼荼羅の役割を果すことになり、祇園会の山鉾町でこれを模写し宵山などの際に奉懸して礼拝したというのである。確かにいわれるように垂迹画として成立した宮曼荼羅の要素が後世に付加された可能性は大いにあろうが、祇園社絵図の場合は特殊な例と考えておいた方がよい。[注5]

この神童寺は、北吉野山と号し、真言宗智山派に属している。寺号は金剛蔵院とも号し、本尊は蔵王権現である。寺伝によれば、聖徳太子の草創といい、白鳳四年（六七六）に役小角が当地の山中鷹ヶ峯で練行中に童子と化した子守・勝手・金精の三神が現われ、役小角はこの童子に助けられて一体の蔵王権現像をつくって安置し、寺号を神童教護国寺としたという。絵図の右上に鷹ヶ峯が描かれ、そこに「行者ノ松」「蔵王権現出現之所也」という墨書があるが、これは当寺の縁起を付加しているのである。しかし、江戸時代の地誌『山州名跡志』巻十六には、吉野の大峯に毒蛇が多く山伏修験者が入山することができなくなったので、相楽郡の笠置山をこの大峯に准じ、この地を吉野に擬して開創したと伝えている。このことについては、『都名所図会』にも同様のことが述べられているが、これが山号を北吉野山という所以であろう。当寺は平安時代初期には興福寺の僧願安が法相・真言兼学の道場として再興したと伝え、嘉吉元年（一四四一）の『興福寺官務牒疏』には、

神童寺。在二同郡狛之郷北吉野一。
僧房廿六宇。修験道（供僧三人。神人二人。）
天武帝白鳳十一年。義淵僧正開基。修験道兼帯。本尊金剛蔵王也。中興応永六年。官務四家再建。

とある。寺伝によれば、元弘元年（一三三一）の兵火により本堂が焼失し、応永十三年（一四〇六）に再建したことになっているが、これらが神童寺の開創、再建についての伝えである。当寺で注目すべきことは、愛染明王、不動明王、毘沙門天、日光・月光菩薩、阿弥陀如来など、平安時代後期の彫像（いずれも重要文化財）が伝えられていることであろう。[注6]

神童子一山を描いたこの絵図（図1）は、江戸時代後期のもので、紙本著色、縦一七〇・七センチ、横九〇・九センチである。この絵図は損傷がかなりあり、昭和六十年七月から十一月にかけて、京都国立博物館文化財保存修理所内の山内墨申堂で修理が行われ面目を一新した。画面は東を上にして描かれるが、表題には「北吉野山金剛蔵院神童教寺伽藍之図」とある。ほぼ中央に「蔵王堂」（挿図1）、その上方に「子守社」（挿図2）「勝手社」（挿図3）「金精大明神」が、その左方に「谷之薬師」、右下隅に「役行者堂」（挿図4）「天神宮」などが整然と描かれ、蔵王堂から役行者堂までの山道にさきの『興福寺官務牒疏』にいう僧房二十六宇に近い数の僧房が所狭しと描かれ

挿図1　蔵王堂（本堂）付近

挿図2　子守社付近

挿図3　勝手社と石造燈籠

ている。ここには中世のというか室町時代の雄大な規模の神童寺が描かれているのであり、往時のいわゆる「気色」が汲みとれよう。この画面のなかで特に目をひくのが「石造物」である。そのすべてを拾い上げてみると、金精大明神境内の「如法塔」（挿図5）、勝手社の左に「法華塚」（挿図6）、左下隅に「心経塚」（挿図7）、蔵王堂の上に「加持塔」「阿迦井塔」（挿図8）、根本観音堂の付近に「熊野塔」があり、この他にも、「北向石不動」「三社岩」、さらには子守社、勝手社の境内に墨書はないが「石燈籠」が一基づつ描かれている。加持塔、阿迦井塔、熊野塔はいずれも七重の層塔形に描かれ、如法塔、法華塚は宝塔形に、心経塚は宝篋印塔形にそれぞれ描かれている。

ここでは次にこれら「塔」のこれまでの評価を整理し問題点を抽出するなかで、埋経の実態の一端について考えてみたい。

3　古絵図に描かれた「塔」

神童寺絵図が江戸時代後期に寛永十年の模本を作図したことは画面左の墨書で明らかなわけである。この原本は伝えられていないが、さきの墨書で永正六年（一五〇九）とわかるのである。それでは描かれた画面はいつ頃の神童寺の「気色」なのであろうか。さきの縁起には、応永十三年（一四〇六）に蔵王堂が再建されたと伝えている

挿図4　役行者堂付近

挿図5　如法塔

挿図6　法華塚

が、おそらくこの前後、十五世紀前半期の堂塔伽藍を描いたものと思われる。この蔵王堂はのち絵図でいえば「役行者堂」の一郭に移転しており、明治六年には天神社内に勝手、子守両社が合祀され、明治十六年には薬師寺（画面左中央の「谷之薬師」とあるのがそれであろう）が神童寺に合併されるなど、江戸時代以降、神仏分離令も加わり神童寺の堂塔伽藍の構成は大きく変貌をとげている。ここでは神童寺、天神社のことについて『京都府地誌（相楽郡村誌）』に詳しく所載されているので、事実関係を明らかにする上で必要な部分を引用しておきたい。

「社」については、

天神社　村社々地東西三十間南北二十間面積五百四坪村ノ東ニアリ天八百日命天三下命ヲ祭ル白鳳四年役小角金剛蔵院創立ノ際同寺鎮守神トシテ勧請ス祭日十月十七日境内老樹森々タリ

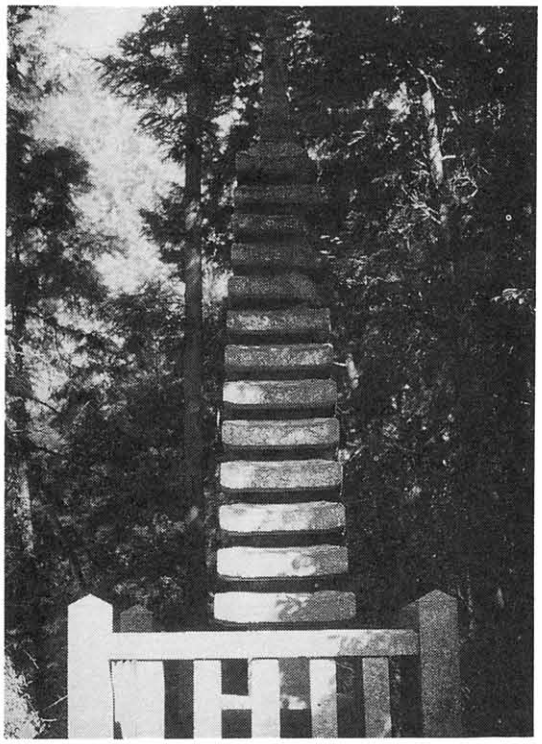
勝手社子守社　子守社ハ俗ニ金生明神ト云フ共ニ祭神詳ナラス旧ト神童寺境内ニ在リテ同寺伽藍神タリ明治六年天神社内ニ移ス神社啓蒙ニ云大和国吉野山ニ祀レル勝手社ハ愛髪命籠守社ハ住吉神同体ナリト

とある。ここで注意しておくことは天神社が村の東に位置しているということである。ここにいう天神社は絵図でいえば役行者堂の右にある「天神宮」と考えられ、『府誌』にいう天神社は子守社のあったあたりなのである。『都名所図会』巻第五の「北吉野神童寺」の項

挿図７　心経塚

挿図８　阿迦井塔・加持塔

挿図９　現在の本堂



挿図10　石造十三重塔（天神社境内）

をみると、蔵王堂が現在の位置に描かれ、現在の弁才天堂と石造十三重塔のあるあたりに「天満宮」「太神宮」が描かれ、すこし離れて西に「行者堂」が描かれている。「子守・勝手両社」は山道に沿って東の位置に描かれ、「袖振山」がその位置を明確にしてくれるし、ここが現在の天神社の位置なのであり、この位置で子守・勝手両社が合祀されたのである。この表現からすれば蔵王堂はこの時には現在の位置に移動しているものと思われるが、この本堂（挿図9）は昭和二十五年に解体修理が行われ、「天文十七年二月廿二日」（一五四八）（内陣虹梁の楔）、「延享二年四月吉日」（一七四五）（縋破風）、「宝暦五年七月下旬」（一七五五）（足固）、「宝暦十一年八月吉日」（一七六一）（棟札、地貫）、「宝暦十三年」（一七六三）（棟札）、「天明八年三月十八日」（一七八八）（棟札）、「寛政十二年三月」（一八〇〇）（内法貫）、「文化三年八月吉日」（一八〇六）（大棟鬼瓦）などの銘が確認されている。[注7]

さて、これまでに神童寺、天神社の金石文としては六つが知られていた。このうちの三つが絵図と関係してくるが、そのすべてを紹介しておくと、石造物関係以外では、建久七年（一一九六）銘の木造伎楽面、弘治四年（一五五八）銘の太鼓があり、残りの四つのうち一つは地蔵菩薩立像の向かって左脇に「（カ）念仏講衆□道」と刻出されている石仏で、他は石塔である。この三つがここでは問題となるのである。いずれも現在、磨滅が甚だしく刻出された銘文の判読が不能であるのが惜しまれるが、幸い、川勝政太郎・佐々木利三氏共著の『京都古銘聚記』に所載されており、その概要を知ることができる。ここで扱おうとしている「塔」の銘文も完璧な判読とはいい難いが、その一は、両氏のいう「神童子天神社石造十三重塔」である（挿図10）。銘文は基礎の一面に刻出されているが、両氏は、

右志者為
父母先師
法界衆生
平等利益
造立□□
建治三丁丑
十月三日

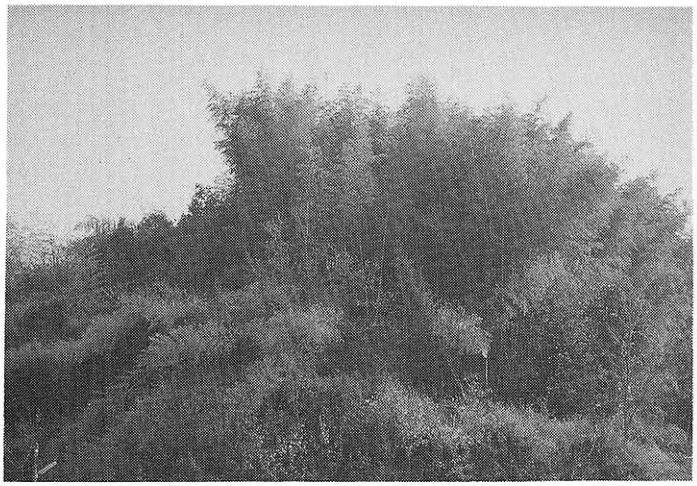
と判読されている。追善供養を目的として造立されたことがわかるが、残念ながら願主等ははっきりしない。五行目の「造立」の下に願主の名前が刻されていたのであろうが、この塔が建治三年（一二七七）に造立されたことは明らかである。この銘文の判読もさることながら、この塔が天神社との関係で論じられていることを問題にしたいのである。現在、神童子村には二基の、それもほぼ同時期の石造十三重塔がある。その一基が天神社境内のそれであり、もう一基は

本堂の左脇にある。ここで絵図に描かれた「塔」にもどると、さきに触れたように層塔として描かれているのは七重塔が三基である。七重と十三重という数の相違があるのでこれから論じることに矛盾が生ずるかも知れないが、おそらく現在あるこの二基は、絵図に描かれた「熊野塔」「阿迦井塔」「加持塔」のいずれかにあたるのであろうし、現在の本堂の関係でいえば、境内のが「加持塔」にあたるものと思われる。こうした絵図を描く場合、堂塔伽藍の配置はもちろんのこと、隅々にまで描写の正確さが要求されていたのである。そのことからすれば十三重を七重に描くことはなかったかも知れないので、ここに想定した塔とは別のものであった可能性がないわけではないが、ここで確認しておきたいことは、これまで私たちがこの天神社境内の十三重塔を論ずる場合、天神社との関係にのみ重きをおいてきたことについては再考をうながすことになったのは事実であろう。このことは本堂の庫裏の庭にある石造燈籠についてもいえる。これも判読不能のところもあるが、さきの両氏は、燈籠の竿中節上下にある銘文を、「(ウーン)奉寄進勝手明……」と判読されている。ここでは下方がほとんど読めないが、「勝手明神云々」ということになれば、絵図に描かれている勝手神社境内の「石燈籠」がこれにあたるのであろう。これにも「神童寺石造燈籠」のキャプションがつけられているが、厳密にいえば、かつて勝手社の境内にあったものが、後世に現在の本堂の庫裏の庭に移されたのであり、勝手社の関係で論じられるべきものであった。これが神仏習合時の社頭景観であり、歴史的にいえば神童寺そのものであったことは事実である。

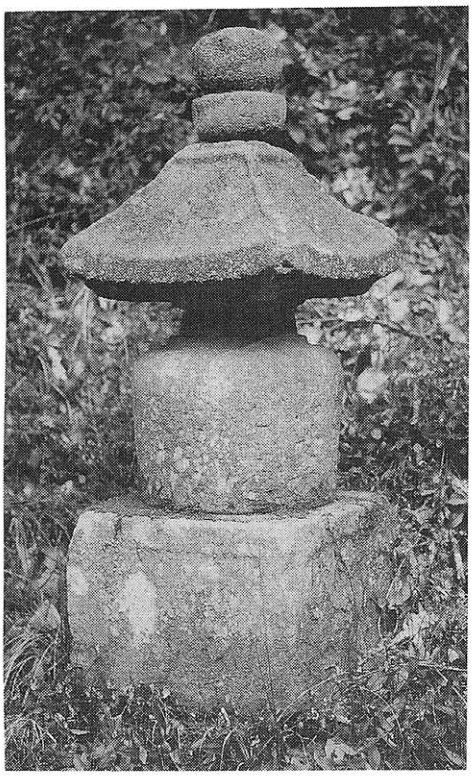
4 「塔」と埋経

埋経が行われる場合、必ず標識がたてられたものと思われる。しかし、時代と共に失われたり、朽ちてしまったりすることもあり、規模の大小はあるがマウンド状をしている埋経の地を発見することがなかなかむつかしい。こうしたことが偶然の機会の発見ということになるわけである。埋経研究のうえで、その標識については、平安時代後期が宝塔形、鎌倉時代が五輪塔形、室町時代以降が宝篋印塔形と常識的に考えられてきたようであるが、遺物にしろ、記録にしろ遺されているものは比較的少ない。誰しもが標識の文献としては、寛弘四年(一〇〇七)八月十一日の藤原道長の金峯山での埋経の際に「金銅燈籠」をたてたという『御堂関白記』と、養和二年(一一八二)四月十六日に最勝金剛院山に埋経した際に「石五輪塔」をたてたという『玉葉』を、記録の論拠として挙げてきた。[注8] しかし、その両者も遺物としては確認されていない。標識そのものがマウンド状の塚とともに遺っているということになれば江戸時代ということになるが、鞍馬寺のように遺構との関係ははっきりしないが平安時代の石造宝塔が遺されている。さらに鎌倉時代の五輪塔、室町時代の多宝塔など遺構との関係がこれまた不明であるが遺されている。

絵図のなかに「如法塔」「法華塚」「心経塚」と、埋経の実態を記載した絵図もめずらしい。これは埋経の実態を示すとともに、埋経がどのような立地条件に行われたのか、又、標識と時代をどのように考えるのかといった根幹にかかわることがこの絵図は示唆している。まずこのうちの「如法塔」からみることにしたいが、これは金



挿図12　現在の心経塚全景



挿図11　石造宝塔（天神社境内）

精大明神の境内に描かれているようであり、宝塔形をしている。これもさきの『京都古銘聚記』では「天神社石造宝塔」として扱われている(挿図11)。そこには、「花崗岩製。総高三尺八寸。今頂上に五輪塔の風・空輪を仮置する。笠下端には二重繁棰を刻出してある。」と要領よくまとめられており、軸部にある銘文も、

奉納
三十八所
如法経
□□此塔
礼拝供養
□知是□
□近菩提
□
仏子□□

と判読されている。十三重塔と同様に磨滅が甚だしく実査してもこれ以上に判読は不可能である。両氏もその八行目には割註で「この行紀年なることほぼ読み得るが、判読困難を以て後考を俟つ。」と書かれている。しかし、それから半世紀近くたった今日ほとんど読めなくなっているというのが現状であり、両氏の判読は今となっては重要である。肝心のところが読めないのは残念だが、三行目の「如法経」は記憶にとどめておく必要がある。これが如法経と読めることは、如法如説に書写したいわゆる如法経を埋めた塚、「如法塔」なのである。子守社もこの一郭に加えて考えるならば、現在の如法塔(この塔の位置は実査した限りでは元の位置とは即断できず多少移動している可能性がある)は、子守社、金精大明神の境内に埋経されていたとい

うことになるのである。

同じ形式の塔が、勝手社左の小高い丘のうえにあるが、ここには「法華塚」とある。妙法蓮華経を書写して埋めた塚、「法華塚」なのである。この法華塚と如法塔をはっきり区別して表記されていることに注目しておかなければならないが、絵画表現とはいえ、同時代を思わせる宝塔形の標識にも注目しておきたい。この二つの宝塔形からいつの時代のものと考えるか判断のむつかしいところであるが、画面左下隅の「心経塚」はおよその検討がつく。宝篋印塔の形式は典型的な室町時代のそれであり、般若心経を書写して埋めた塚、「心経塚」なのである（挿図12）。

絵図はあくまでも絵画的に表現されるので、こうした表現から埋経の標識の時代判定をするのに無理はあるが、地理的にいえば正確に位置が描かれるというのが絵図であるので、位置はほぼ正確であろう。現在、踏査した限りでは法華塚は確認できないが、如法塔、心経塚は確認できる。埋経の地理的環境というか立地条件としては、平安時代に限らず「名山霊寺」が選ばれ、廻国納経として埋経が行われた。そのなかでも金峯山は埋経の「聖地」として代表的な存在であったわけで、藤原道長をはじめ多くの藤原貴族が埋経の地として選んだのである。この神童寺は、この吉野に擬せられ、山号を「北吉野山」と号したわけで、こうしたことからいえば、藤原貴族たちがここ神童寺を埋経の地に選んだことはあながち否定できないし、神童寺への埋経を考えるうえでは重要な視点ということになろう。

5　結びにかえて

神童寺絵図に描かれた石造物から、特に埋経の実態の一端を考えてきたわけであるが、残念ながらいずれも推定の域にとどまっている。現状からしていたしかたないが、近年の考古学による発掘調査が行われ埋経についてのこれまで不明であった塚そのものの実態や埋経方法が明らかにされてきた今日、事前調査の段階でも、発掘調査の際にも、こうした絵図に埋経のことが誌されていることは、学問的に大いに役立つのである。現在、埋経そのものの実態を読み込んでいくというのではなく、埋経の立地条件がどうであったのかということを絵図から確認することが重要なのである。埋経そのものは従来の予想をはるかにこえて平安時代後期から廻国納経的な性格があったようであり、絵図での精査が望まれよう。さきの祇園社絵図のなかに「如法経塔」という記載があり、マウンド状のうえに典型的な鎌倉時代の形式をもった石造五輪塔が描かれている。しかし、今のところ祇園社の関連史料でこの如法経塔の実態を知ることができる史料は全くない。この絵図が祇園社における如法経塚について知りうる唯一のものであるが、こうしたものが絵図に描かれているということを明らかにしておくことでも、埋経研究にとっては一歩前進ということができよう。確かに祇園社は秀吉の時代にこの如法経塔のあたりに多宝大塔が移建され見る影もなくなったが、明治の神仏分離の際に神社から仏教的施設が全くといっていいほど廃棄されており、神社における埋経の実態を究明することはかなりの困難が予測される。埋経そのものの施設も取り壊わしたこともあったか

も知れないが、その多くは地上の標識であったわけで、マウンド状になった塚もこうした時に整地されたのであろう。こうなると絵図の果す役割は重大なのであり、埋経研究に絵図を積極的に素材として援用することが望まれるのである。ここに紹介したことが今後の埋経研究にすこしでも役立てば幸いである。

〈注〉

1 関秀夫氏『経塚地名総覧』（考古学ライブラリー24）　ニュー・サイエンス社　昭和五十九年

2 竹原一彦氏「豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）発掘調査概要」（『京都府埋蔵文化財情報』第二号所収）　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　昭和五十六年

3 拙著『鞍馬寺と埋経』（くらま山叢書9）　鞍馬寺出版部　昭和六十一年

4 三宅敏之氏「遺跡と遺構」（『新版仏教考古学講座』第六巻経典・経塚所収）　雄山閣　昭和五十二年
三宅氏はこのなかで埋経の選地を五分類されている。その第一が寺院や神社の境内あるいはその近傍、第二が第一と関連して人々が聖なる所と考える霊地、第三が第一と関連をもつことの多い墳墓の近辺、第四が第一あるいは第二とも関連する場合があるが周辺より一段高い見晴しのよい丘陵地、第五がこの四つ以外でどうして選ばれたのか特に指摘しえない所、の五つをあげられている。

5 景山春樹氏「祇園社の古絵図について」（『神道美術』所収）　雄山閣　昭和四十八年

6 『京都の文化財第三集南山城編』　京都府教育委員会　昭和四十四年

7 注6に同じ

8 三宅敏之氏『経塚論攷』　雄山閣　昭和五十八年

図１　神童寺絵図　京都 神童寺